

初日のかげに

かほるらん』

二見か浦

東 久米子

横雲わかれて

今ぞあくる

二見か浦和の

朝のみそら

はのく句へる

霞わけて

豊さか昇るや

初日の影

七福神

小林 恒子

樂しき天のみ園より

この世の幸をもたして

年の始にはらくと

たからの神の七はしら

降り来ませるよき日を

空ものどかにかまつゝ

たふたき恵とこととはに

かはらぬ春の千代八千代

新年五首

佐々木信綱

船中新年

妻子らと屠蘇の酒くまず五たびの

春にしわひぬ舟の上にして

山上新年

むら山の高きにのほり見さくれは

ひびがしの海初日出むとす

田家新年

都より歸りし子らともろともは

年はきさけをくむわした哉

旅中新年

はかなくも年を迎へてさすらへの

我身かなしき旅すかた哉

書窓新年

ふるき書つみかさねたる文机の

わたりはき清め年を迎ふる

新年

吉敷要

いとし子に去年のまゝなる衣着せて

さひしき年を迎へける哉

万歳のすてつゝみして歸りゆく

門邊さひしき白梅の花

賤か屋も玉のうてなも初日かけ

同じ光にとしたちにけり

あづけたる里子も家にかへり来て

年の初春にきはしきかな

初日さす豊明殿の南の

みさりに匂ふ梅の初はな

雑詠五首

石樽千亦

鮒つりて矢ばせに急ぐむしる帆の

帆の上斜に夕日さすなり

芒かくれ駒にむちうつ蝦夷人か

けつらぬ髪にあられふるなり
はたご屋の火鉢圍みて道すから

なづみし雪を語りあふ哉

丸木橋をちて朽ちたる谷川の

をちの笹生にうくひすの鳴

稻の上に幼子のせて里人か

馬追ひ歸る野路の夕くれ

折にふれて

西升子

富士のねのみ雪はこそまゝなから

あらたまりても見ゆるけさ哉

いたつらに老にし影を若水の

かゝみに見るも耻かしきかな

うつみ火のあたりはなれぬ老の身も

花に遊はん春は來にけり

しほけふり空にかすみて伊豆の海や

遠つ嶋ねも春たちにけり

見るかけもなしと思ひし賤か屋の

はひりのやふに鶯のなく

その折々

村山元子

重き荷をあへき引くこそあはれなれ

うしとは誰か名つけ初けむ
いもうと、共に遊ひし古里の

野邊は昔にかはらさりけり
母君のたちぬいまし、我袖を

露のやとりとなさじとを思ふ
玉川の流の末を酌む人の

心も玉にすすよしもかな
ぬふ針もいつしかやめて幼子の

眠れる貌をまもりぬる哉

遣羽子に上手盡すや姉妹

書初や太郎冠者のたのもしき

年禮の繪端書多き机哉

長幼序ありみつ置たる屠蘇の盃

愛 櫻 涼 月 船 村 二 樓

御手植の松の梢や初旭影
追羽子の行衛や庭の寒紅梅
萬歳や家毎梅咲く村に入る
蓬萊の米こぼれたる疊か那
元朝や左右に開く金襖
本箱に元旦の詩を題すか那
三尺の庭の初日や谷の菴
遣羽子の群に入りけり屠蘇の醉
庭に積む雪見ながらの年酒哉
万歳や戸口に烏帽子落んま
子女多き家庭の春や羽根手鞠
居催促初雞聞てかへりけり
猿引の頭巾冠りし小猿か那
初日の出參賀の馬車の轡きけり
遣羽子や洛陽の公子兵に堪えず
落したる羽子雞の啄みけり
羽子それてあれま云はんも垣隣
庭先や羽子つく夫人身重なる

杏子 鷓鴣 芝水 鬼水 郊外 移雪 武骨 笛水 直哉 石文 菰堂 木公 松軒 龍鼓 夜月 圓係 春子 聽瀟